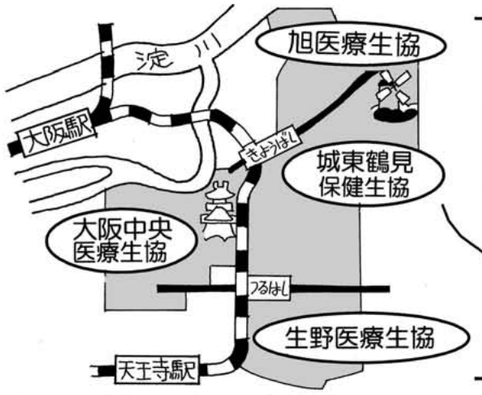
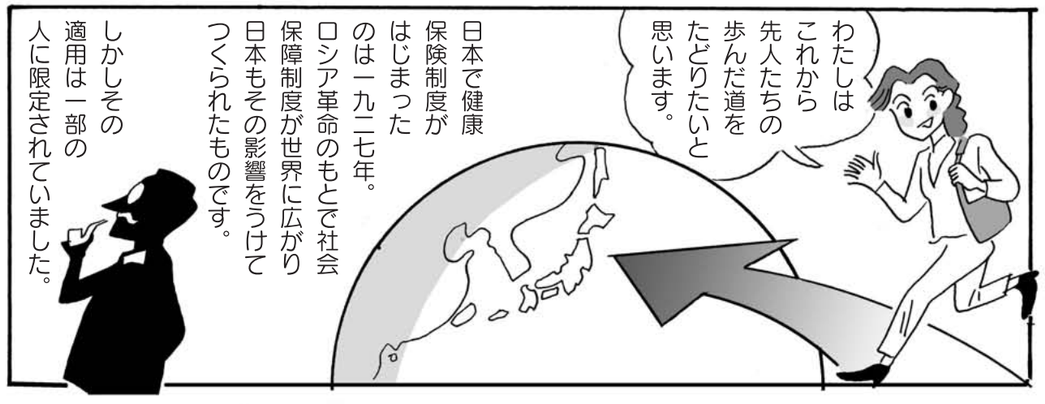
ヘルスコープの歴史を言方ねて



ヘルスコープおおさかは大阪市東部にあった城東鶴見、旭、生野、中央の四つの医療生協が２０００年４月に合併して誕生しました。

誰にもへだてなく医療を、こんな思いで活動してきた民主医療運動。

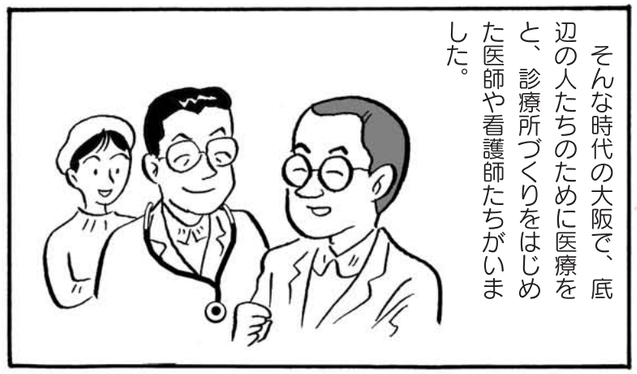


日本で健康保険制度がはじまったのは一九二七年。ロシア革命のもとで社会保障制度が世界に広がり日本もその影響をうけてつくられたものです。

しかしその適用は一部の人に限定されていました。

一九二〇年代一般家庭では、一年に一度訪問してくる富山の薬屋さんから薬を買うことが、医療だと思われていた時代でした。

さらに生活のまずしい労働者、職人層では病気が重くなるまで仕事を続け、身体に気を配る余裕もありません。



そんな時代の大阪で、底辺の人たちのために医療をと、診療所づくりをはじめた医師や看護師たちがいました。

一九二五年、都島区東野田に公衆病院を設立した岩井医師もその一人です。

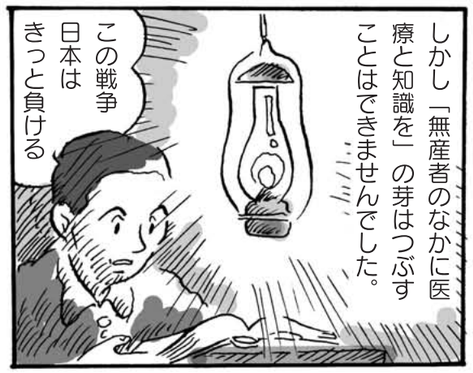
でも当時は貧しい人々の中に入って治療する行為そのものが危険思想と見られ、官憲の弾圧をうけた時代でした。

「安心して、こどもを産める世の中にすること…」と一九二八年、労農党としてただ一人、国会議員になった山本宣治は―また医療の先駆者でもありましたが―

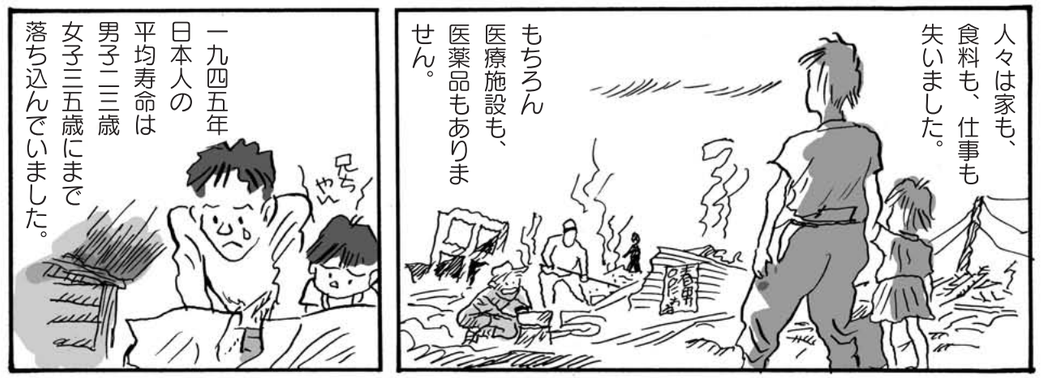
翌一九二九年、帝国議会中に、右翼のテロによって殺害されました。

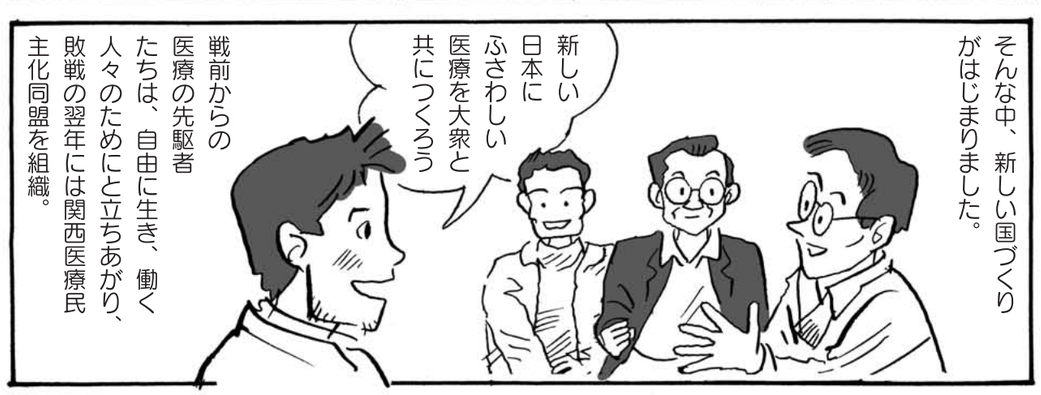
多くの医師が山本宣治の遺志をつぎ、無産者のための医療に取り組みました。

大阪でも、片町無産者診療所、三島無産者診療所など、つくられましたが、官憲の弾圧をうけ潰されました。
三島無産者診療所


しかし「無産者のなかに医療と知識を」の芽はつぶすことはできませんでした。
この戦争日本はきっと負ける

すべての人々が戦争のために動員された十五年間。
日本は破れ、軍国主義は崩壊しました。

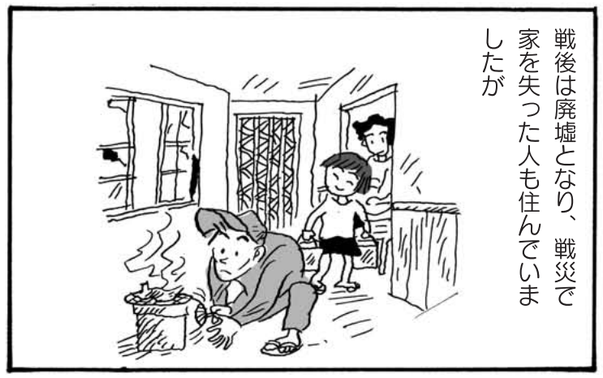

人々は家も、食料も、仕事も失いました。
もちろん医療施設も、医薬品もありません。


一九四五年日本人の平均寿命は男子二三歳女子三五歳にまで落ち込んでいました。
足ちゃん
そんな中、新しい国づくりがはじまりました。
新しい日本にふさわしい医療を大衆と共につくろう
戦前からの医療の先駆者たちは、自由に生き、働く人々のためにと立ちあがり、敗戦の翌年には関西医療民主化同盟を組織。

健康保険の改善を要求し、職場での女性労働者のための「生理休暇読本」を発行しました。
生休を法律で定めましょう
十三や、西淀など労働会館のなかに診療所がつくられ、工場労働者への健康診断、医療の講演など知識を広めていきました。
いかん栄養失調だ
みんなそうですわ

一九四六年には日本国憲法ができました。
戦争放棄
戦争放棄と共に憲法二五条で「すべて国民は　健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障、および公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」とうたわれました。
新しい憲法
文部省発行『あたらしい憲法のはなし』より

上二で
上本町二丁目に、戦前から小児科専門の高級病院として有名な高洲病院がありました。


戦後は廃墟となり、戦災で家を失った人も住んでいましたが

高洲医院
高洲医師の長男の基医師が復員後、建物の一角に高洲医院を開設。

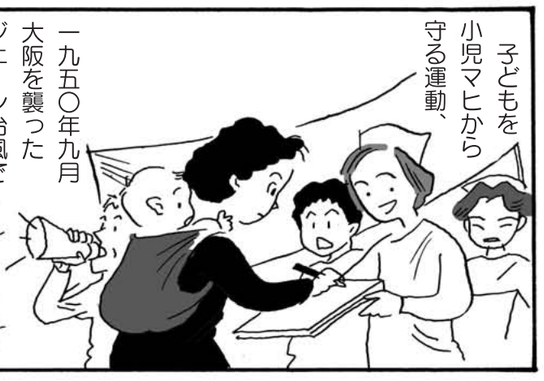
さらに空いている場所を「関西民主会館」として当時の共産党に提供しました。
一九四九年、高洲医院は「上二診療所」と改名し、地域の労働者、住民とともに「上二病院」へと発展していきました。

戦後のきびしい税金取りたての中、生活擁護同盟が組織され商工業者を中心に厳しい徴税攻勢とたたかいました。

一九五三年には民主医療をめざす全国組織の民医連結成。

上二病院の横には大阪市バスの車庫があり、バス労働者も民主病院の支え手となりました。

子どもを小児マヒから守る運動、



一九五〇年九月大阪を襲ったジェーン台風で西大阪一帯が水につかり大きな被害がでました。

上二病院では、医療班を編成し被災地での救援活動にとりくみました。

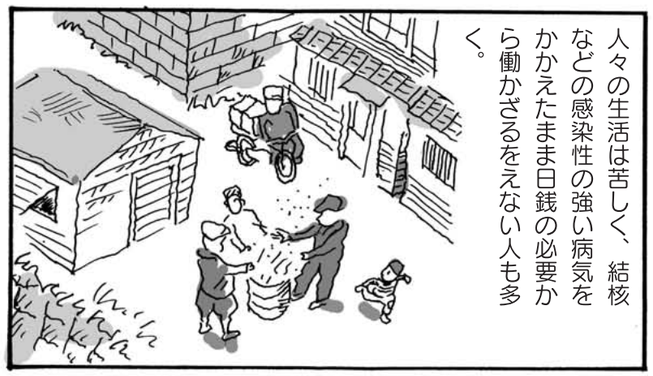
労働災害、職業病にたいする治療と労働者の労災認定闘争へのはげまし。

一九五〇年から六〇年へ上二病院は上町台地の地から民主医療の芽を育て広げていきました。

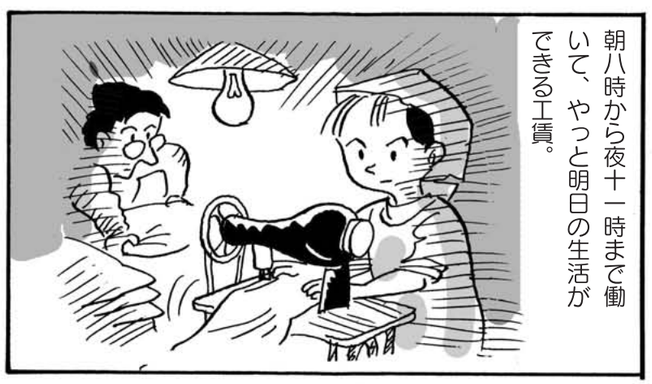
田島で

一九五〇年、家内工業、零細企業の多い生野区田島地域でも「自分たちの手で診療所を」という運動がおこりました。

人々の生活は苦しく、結核などの感染性の強い病気をかかえたまま日銭の必要から働かざるをえない人も多く。



朝八時から夜十一時まで働いて、やっと明日の生活ができる工賃。



生活擁護同盟、朝鮮人協会、民医連などがよびかけ、みんなで出資金を出しあって一九五一年田島診療所を開設。

当初はホントにいばらの道。医師、看護婦の給料遅配。医薬品、医療器具の代金も払えず、ギクシャクした運営の毎日。

せっかく手に入れたレントゲン機器を持ち逃げされたこともありました。

それでも地域に無料健康診断を広げていきました。
みなさん健康診断をやってまーす身体の具合や、くらしの相談もお気軽に
生活保護の患者をはげまし。
町の人々に生きる望みをあたえていきました
一度診察に行ってみたら
お金がなくて栄養のあるもん食べられないんです
ハハハ
豆腐を食べてたら大丈夫
赤川で
戦後、旭区の西半分は焼け野原となり、低所得者の木造アパート、借家住宅が立っていきました。
医療の手は届ず、
いき倒れや
二、三日食べてないのとちがうか
一九五四年低所得者層、在日朝鮮人の中から、診療所づくりの声が生まれました。
貧富や人種にわけへだてない医療を
自分たちの手でつくろう
出資を募り、旭・都島医療生活協同組合設立の相談がはじまりました。
場所は朝鮮初級学校の一角を借り、医師は高洲斉先生が引き受けてくれました。
赤川診療所は生まれた時から貧しい人々のための診療所として位置づけられていました。
診療所で見てもらわんと
治療費の払えない人に集金に行くこともありました。
一九五八年国民健康保険法が施行されました。大阪市と粘り強い交渉で世帯主八割、家族五割を認めさせる先頭に立ちました。
わしら、お金は無いけど、行動力はある
大阪市に実情を知ってもらわんと
診療所は一九六二年、赤川一丁目に移転
赤川診療所
自前の建物になりましたが、すごく狭く、患者さんはおもての歩道で診療待ちをする状態でした。
はやってる診療所や、患者が外まではみ出てる
赤川診
中が狭いだけです

城東で

一九五三年、日本の無産者医療運動に大きな功績のあった岩井医師が還暦を迎えた記念に「先生ゆかりの地、城東区に記念病院の設立を」という提案がなされ、

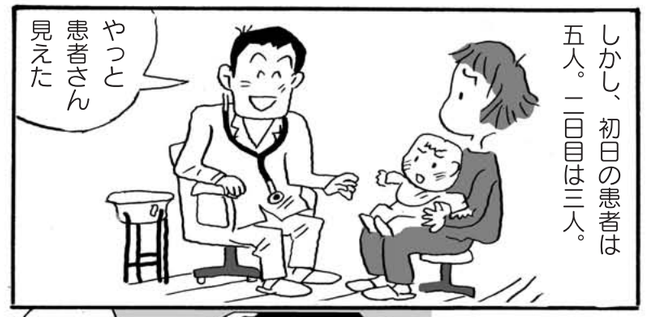
全国からの賛同者の募金でいまの城東診療所（当時岩井記念会城東診療所）が建てられました。

また一九五七年に蒲生厚生診療所（母体は岩井医院）も開設。

「健康友の会」も生まれました。

一九五三年、「関目・野江地域にも民主診療所を」との声が上がり、話し合いがもたれました。

四七一人と一労組からの寄付が集まり野江診療所が開設されました。



しかし、初日の患者は五人。二日目は三人。

野江診療所も軌道に乗るまでは大変な苦労の連続。

事務長は自転車で金策に走りまわるという日が続きました。

一九七六年、城東、蒲生、野江の診療所が一緒になり城東鶴見保健生協が誕生しました。

血圧計をくばり組合員ひとり一人が自らの血圧を測る運動。

一日に何度も測れるからやってよかった

みんなが楽しめる健康まつり

あたたかい地域づくり組合員づくりの班会

保健生協があるから歳をとっても安心して住める

生協は地域の健康を守るだけでなく

医療制度の改悪に反対し、社会保障の充実へ、声を広げていきました

戦前から民主医療をめざす人々と地域で働く人々の熱い思いが

医療生協に実をむすんで

明日の健康と元気な社会づくりへあゆみ続けているのですね